岡谷市議会　総務委員会　行政視察報告書

【総体事項】

１．視察日程：平成３０年７月４日（水）～６日（金）

２．調査事項（視察先）

（１）地方創生の取り組みについて（兵庫県 豊岡市）

（２）おの検定について（兵庫県 小野市）

（３）ことば蔵の取り組みについて（兵庫県 伊丹市）

３．視察参加委員

委員長	中島　保明
副委員長	今井　康善
委員	武井　富美男
委員	早出　一真
委員	今井　秀実
委員	大塚　秀樹

【視察地報告】

１．調査事項

地方創生の取り組みについて（兵庫県 豊岡市）

人口：約８０，３００人　　面積：６９７．７ｋ㎡

（視察事項）

【地方創生総合戦略（平成２７年策定）人口ビジョン】

豊岡市も当市同様人口減少が続いており、８万２千人（平成２７年国勢調査）の人口が、２２年後の２０４０年には５万７千人、４０年後の２０６０年は３万８千人と現在の人口の半分以下になると予測している。

高校卒業後、大学進学・就職で市外へ転出した若者が、地元に戻って来ない。特に女性の人口回復率が男性の半分である。未婚率も年々上昇し、出生数も減少しているが、２０～３９歳の１００人当たりの出生数は増えているので、結婚さえすれば維持できるのではないかと考えている。

人口減少対策のターゲットは若者（特に女性）。

・戦略Ａ社会増「若者の移住・定住促進」

・戦略Ｂ自然増「結婚支援・多子出産応援」

【戦略のめざす目的と取り組み】

大都市にはない豊岡に暮らす価値や、小さな世界都市ローカルグローバル都市を目指す。豊岡に暮らす価値を認め、豊岡で暮らすことに自信と誇りを持って暮らす人が増えている。行政だけでなく、市民、団体、企業、地域の方々と共同で達成していこうという究極の上位目的。

２０４０年の人口を、６万２千人、推計のプラス４，５００人に緩和したい。若者回復率を２０２５年までに５０％に引き上げ、合計特殊出生率を、２０３５年までに現在の１．８２から２．３に引き上げる。

推進体制は、社会増（移住・定住促進）が「ＵＩターン戦略室」、自然増（結婚支援・多市出産応援）が「ハートリーフ戦略室」。その下に個別の事業がある。

◆事業内容

・高校の卒業生に向けたメッセージとして、「この春、豊岡市を巣立つ皆さんへ大学を卒業したら戻って来いよ」というポスターをまちじゅうへ掲示している。

・「２５歳同窓会」。市内の高校等を卒業した２５歳の若者が集う同窓会であり、ふるさとの暮らし･仕事･企業などの価値を伝えるとともに、市内外の２５歳同士の結びつきを強めることで、ふるさとの良さを再認識してもらい、地域の活性化（Ｕターン）に繋げる。２５歳は社会に出てから少し落ち着いて自分の生き方を見つめ直す時期であると考え、この時期に「豊岡に帰っておいでよ」というメッセージを伝える。
・首都圏で毎年開催している情報発信イベント「豊岡エキシビション」では、雑誌・テレビ等のメディア、企業の皆さんに、豊岡の取り組みを紹介するもので、豊岡への誘客のほか、市民の皆さんがメディアを通じて豊岡市の魅力を再認識し、愛着がさらに増すことを目指している。
・豊岡は鞄のまちであり、鞄の学校「トヨオカ・カバン・アルチザン・スクール」を２０１４年に開校し、毎年、鞄の技術者の養成を行っている。
・豊岡稽古堂塾では、豊岡市の職員、民間企業の若手がプロモーションや仕掛けをしていくための知識を身につけるための人材育成の塾を行っており、起業や企業等で活躍する若者を育てる取り組みを行っている。
・永楽館歌舞伎は、片岡愛之助にお願いし、伝統芸能を守る活動をしていただいている。
・コウノトリも住める豊かな環境を作っていこうということで、減農薬、無農薬のお米を作っている。
・コミュニケーション教育として、ふるさと教育（豊岡の魅力を小中９年間で教える）、英語修得（幼稚園・保育園から英語あそび保育、小１から高校までの英語教育）、演劇によるコミュニケーション能力の向上（小中学校で、演劇手法を用いた教育）を行っているほか、観光業、宿泊業につながる県立専門大学の誘致を進めている。（目標：２０２１年度開設）

【結婚支援・多子出産応援】
　社会福祉協議会が行っている婚活プロジェクトの支援。ボランティア仲人を増やす取り組み。婚活イベント、子育て広場を６つの地域に作り、子育て中の親が子供と触れ合う機会を作っている。

２．視察日時　　平成３０年７月４日（水）１４：００～１６：００

３．参加者所感

○人口減少の緩和策は、結局地域間競争により他と優位性、イメージづくり、自然や文化資産の活かし方によって形づくられるものであると感じている。豊岡市のように将来の目指すべき明確なビジョンを示すことは、住民にとっても一人ひとりが果たすべき役割を考える機会となり、一体感が生まれてくるのではないかと思う。

○岡谷市において、目指すべき人口ビジョン、まち・ひと・しごと地方創生総合戦略、総合計画の連動性は必要であるが、理念的の共有だけではビジョンが明確になりにくい。豊岡市の地方創生総合戦略は第４版となり修正を繰り返し行っている。人口ビジョンに結びつかない戦略やＫＰＩは常に更新していくところは参考にすべき点であると感じる。

○岡谷市の総合戦略にもＵ・Ｉ・Ｊターンの施策があるが、直接高校生に機会を捉えて話すことが必要と感じた。最もそのための受け皿整備も必要だろう。

○コウノトリを地域振興に活用しており、行政が生き物を飼うことの様々な効果が感じられた。生き物を飼うことは、子どもの健全育成にとっても大切なことであり、自然界の一員としての子どもに感動を与えるようなことを行政がすべきと強く感じた。それが自治体独自の地方創生だと思う。

○一朝一夕でできるものではないが、ローカルな取り組みを地道にやってきた効果が、コウノトリ、城崎温泉、永楽歌舞伎等の魅力的な文化の発展につながっており、ふるさと教育の中で、郷土愛のある若者が育っていると感じた。

○コウノトリ、城崎温泉を強く押し出している点は魅力的だが、人口減少に歯止めをかけるという課題は、自治体のみの取り組みには限界があり、国政レベルで、若者の雇用改善を中心に大胆な政策転換なしには進まないものであると、改めて認識させられた。

○若者が戻ってきたくなるようなまちづくりは重要であり、岡谷市で何ができるか改めて出し合っていくことが重要であると感じた。

○豊岡市は、地方で生活していくうえで、経済的にも安心して住める環境があり、住民が誇りを持って生活していかれる地域である。岡谷市も住民が住みよい環境づくりを考えていくことが大事だと思う。

【視察地報告】

１．調査事項

おの検定について（兵庫県 小野市）

人口：約４８，８００人　　面積：９３．６８ｋ㎡

（視察事項）

・小学校８校、中学校４校、市立の特別支援校１校。児童生徒数４３００人、（各学年約５００人）、教職員数３００人程（県職員）。教職員の人事は小野市で行って　おり、初任のときに小野市に赴任し、その後異動を希望しなければ、定年まで小野市にいることができる。マンネリ化などのデメリットもあると思うが、「おの夢と希望の教育」に賛同してくれる先生がいれば、しっかり推進できるシステムである。

小中一貫校として、小学校２、３校を集めて中学校を編成している（１箇所だけ小中各１校）。保育所１４園（民間）、幼稚園２園（公立）。

平成１７年４月、東北大学教授川島隆太氏が小野市教育行政顧問に就任していただき、助言、脳科学の知見に基づいた教育システム、教育施策を立ち上げている。１５年間で義務教育は終了するが、母親のお腹に命が宿るマイナス１歳を入れて１６カ年教育としている。

川島先生は、前頭前野の部分を育てることが重要とし、学んだり、覚えたり、考えたりの思考力・学力に近い内容をコントロールし、我慢したり頑張ったり、コミュニケーションしたり、仲良くすることが大事であることを、学校や保護者と共有しながら進めている。前頭前野の成長は、生まれてから３歳までに一気に育ち、その後緩やかに成長したあと１０歳を超えた頃から大人の脳に向かって自立する方向に成長する。就学前は保護者にとにかく子どもと関わるよう伝える。基礎・基本を学習習慣、生活習慣も含めて定着させる。小中一貫教育を進め、５，６年生から９年生まで大人の脳へ向けて自立して育てることを３つの柱にして取り組んでいる。

川島先生の教育講演会を毎年開催しており、全小学５年生と保護者、市民が参加する。脳が働いているときに赤くなる現象を実際にその場で実験するほか、霊長類研究所の先生が、人とマントトヒヒの脳を比べ、人の脳の素晴らしさを教える。おの検定、計算、音読、言葉で伝えているときの脳の状態を見る実験

を見てもらい、頑張って学習することで脳が発達して夢に近づけるということなど、子どもたち等に理解してもらっている。

前頭前野が関係しているので、スマートホンを使えば使うほど心のコントロールがしにくくなる、との話もしている。

前頭前野を鍛える３つの原則、１.読み書き計算を行う　２.コミュニケーションを行う　３.手や指を使って作業する、という脳科学の知見をベースに教育・子育てを進めている。

平成１６年、学力低下が叫ばれていたこともあり「おの検定」を取り入れた。おの検定には、体力検定（縄跳び）もある。そのうえで教科の学力があり、思考判断表現力があり、総合的に生きる力を育成していく。その原点になる部分をおの検定でカバーしようと始めた。家庭学習の習慣緩和については、基礎学力だけでなく自学自習の部分や、やればできるチャレンジ精神をねらいに行っている。

テキストは、現場の先生が編集し、何回か改訂している。小学校版、中学校版（英語あり）があり、テキストを先生たちが自作することで学びを深めている。筆順や間違えやすい漢字もテキストに取り入れて、子どもたちが基本自学自習できることを目的に行っている。

市教育委員会で採点をし、フィードバックする。その中で間違えやすいものは間違えランキングとして指導に活かし、何度か再チャレンジする。できるだけ取りこぼしをしないように底上げをしていくシステム。基本全員が受け、学期に１回実施。その学年のものを確実に定着させていくというもので合格は８０点。学習支援の職員を３人雇用し、２人が主に学校で支援し、どこでつまずきやすいかを事前に共有し丁寧な指導を行っている。

できた子どもには認定証を発行し、みんな頑張ったら最後「頑張り賞」を発行している。

市民もおの検定が受けられ、児童館やコミセンにて親子で、ＰＴＡで、高齢者施設で、刑務所で受けるなど、昨年１０月で１１万人の受験者を数えている。

就学前にパパママ教室、７か月児教室、いきいき子育て教室において、子育て教育、家庭教育をするほか、脳科学の理論に基づいた子育てについて説明している。保護者への啓発は「寝ること」「バランスよく食べること」「コミュニケーション（よく誉めてあげて）」の３つ。

２．視察日時　　平成３０年7月５日（木）１４：００～１６：００

３．参加者所感

〇全市あげて取り組む姿勢は、教育行政のリーダーシップの強さを感じた。おの検定のような基礎学力の向上への取り組みこそ取りこぼしをしない教育につながり、将来への夢を持つことにつながり生きる力となるのではないかと思う。岡谷市においても基礎学力向上に向けた部分では全市あげた取り組みがあっても良いのではないかと感じた。

〇岡谷市と同規模の自治体として教育に関する予算、内容についてさらに比較しながら取り組める事柄があるのではないかと考える。

〇「おの検定」は参考となる部分が多々あったが、岡谷市の学校現場にただちに持ち込むことは、岡谷の子どもたちや教員の現状から難しいのではないかと考える。

〇岡谷市とほぼ同規模の市であり、地方都市の抱えている課題も共通点が多い。教育だけでなく、行政全般について学べるものがある市と感じた。

【視察地報告】

１．調査事項

ことば蔵の取り組みについて（兵庫県 伊丹市）

人口：約１９７，０００人　　面積：２５．０９ｋ㎡

（視察事項）

〇基本コンセプト

誰もが気軽に訪れて交流することができる『公園のような図書館』

手狭になった旧図書館（市役所隣接の３階建　昭和４０年築）から新築移転。交流フロア運営会議では、皆さまのアイデアから様々な交流イベントが誕生している。

「図書館機能」「人と人が交流できる機能」「伊丹の歴史・文化を発信する機能」これら３つを軸に、図書館の持つ集客力による中心市街地活性化の役割を担っている。

〇特　色

構造：地下１階、地上４階建て、延べ面積６，１９４㎡

１階／交流フロア、ぎょうじのへや、多目的室、ギャラリー

２階／児童書コーナー、伊丹作家コーナー、雑誌・新聞コーナー

３階／一般書コーナー、情報交流ルーム

４階／研修室、会議室

地階／多目的室、自動書庫

１階は市民の交流の場となっていて、この交流フロアで実施されるイベントなどは誰でも参加できる「運営会議」で意見を出し合い決定している。自分がお薦めする本と他の人のお薦めの本が交換できる、市民が作る本棚「カエボン」など、市民のアイデアから多数のイベントが誕生している。

市民が図書館を利用するだけでなく、図書館の主役となることで、市民の力を最大限に活かした図書館運営を行っている。

２０１６年には、先進的な活動を行う公立図書館や大学図書館、図書館関連のプロジェクトなどを表彰する「ライブラリー・オブ・ザ・イヤー２０１６」の大賞に、ことば蔵が選ばれた。

○市民が作るカエボン

館内に設置されている本が交換できる棚（カエボン棚）に自分のお薦めする本を持参し、自作の帯をつけ、他の人が置いたお薦め本と交換できる仕組み。

○「ことば蔵」の機能

・２０万人都市にふさわしい今日的な図書館機能

・人と人とがふれあい、語りあい、学びあう交流機能

・伊丹の歴史・文化を発信・体感できる機能

○イベントの開催

「ことば蔵運営会議」は第１水曜日に開催し、自分のやってみたいことを持ち寄り、どうすれば実現できるか考える場となっている。年間のイベント数は平成２９年度２２５回。土日はほとんど開催している。予算約１５０万円（チラシの作成、印刷製本費）。開かれたイベントで、誰でも参加できる。自分の得意なことを講師となって教える「まちゼミ」であり、ノーギャラでも喜んで講師等をしてくれる。

２、３階へ誘導できるイベントを組んでいる。

２．視察日時　　平成３０年7月６日（金）９：３０～１１：３０

３．参加者所感

○ＩＣＴを活用し、ＩＣチップを使った先進的なシステムを構築して膨大な本を管理している。図書館の司書が本来取り組みに特化できるように工夫されている。まちづくりの視点から図書館を活用することは有効である。

○多くの人が集まる場として図書館を中心にしたまちづくりは岡谷市も参考にすべき点だと思う。

○ことば蔵の入口は狭いが奥行きが広く、朝のオープンとともにかなりの入館者があり、老若男女くつろいでいた。人口が多いためかとも思うが、図書館の運営方法の工夫で、中心市街地の活性化に大きく寄与することができると認識した。

○市民誰もがイベント企画に参加できる交流フロア運営会議のようなものは、場所を図書館としなくても実施できるものであることから、岡谷市でも実現可能であり、模索していくべきと感じた。

○図書館機能の充実・強化、市民が交流できる場としての機能の発揮という両面が実現されており、素晴らしい図書館だと思う。

○伊丹市は地方都市というより都市圏のまちという印象が強く、だかこそこのような図書館運営ができているのではないかと感じた。

○岡谷市においても市にある施設を活用し、美術考古館、イルフ童画館と交流しながら、マンパワーにより図書館のイメージアップを図ることができるのではないかと思う。